

水泳指導における 安全対策上の留意点

京都工芸繊維大学

基盤科学系教授

野村照夫

水泳指導の安全管理対策

- 安全な水泳指導はチーム・ティーチングである。
- 指導を始める前に、水泳指導の安全管理体制について、外部専門家である学校危機管理官等に評価・助言を得て、計画や組織を整備し、安全の心構えや情報を教員全体で共有する必要がある。
- 校内にプール管理委員会を設け、監視・指導・環境整備・救護などの明確な役割分担を協議する。
- 健康カードや要配慮児童の情報に基づく健康や泳力など、個々の特性を把握する。
- 要配慮児童については、水泳帽や水着の色で識別しやすくし、担当教員を配置し、当該児童の傍らを常に離れることなく監視に当たらなければならない。

指導の内容

- 自己保全能力を確保することが安全対策上必要である。
- 浮沈を利用したボビング呼吸や浮漂位から立位への姿勢変換などを内容に組み入れる。不意に顔が水中に浸かっても慌てることなく呼吸を確保する技能や水底に足を着いてから顔を水面上に挙げて立つ動作は、生きるために先ず身に着けさせるべき技能である。
- 学習を進めるにあたり、児童が二人組でお互いの安全を確認しあうバディ・システムを採用することで安全性は一層向上する。

監視など

- 複数の監視者が異なる角度からプール全体を見渡し、児童の動静に満遍なく気を配る必要があるため、指導者と明確に区別し、役割交代するときも水面から目を離さないことに留意する。
- 大型フロート補助具の利用は、監視の視界を妨げる可能性があるため、利用数や利用目的を明確にするとともに十分な注意が必要である。
- 環境整備者は、水質、水深、用具などの管理のみならず、プールサイドの散水やゴミ拾いなど中も行うので、水面から目を離すことになる。
- したがって、役割分担で、いつ、だれが、どこで、何を行うのか工程表を作成すると油断や重複を回避できる。

プールの水深管理対策

- 標準的な学校のプールには、底面に排水用の傾斜が設けられており、水深差が20cm以上ある構造のプールが多く、同じプールの中でも場所によって大きな水位差があることを指導者は共通理解し、児童にも注意喚起が必要である。
- 指導対象に対して適正な水位設定の基本を設け、それが確保されているかを確認するために、プール側面に水位表示の見やすい目盛りを設ける。
- 多くの児童の胸あたりが水面から出る水位（低学年80cm、中学年90cm、高学年100cm）を目安とする。
- 水位変更のための給排水は、排水口への吸引や急激な水温変化を起こす可能性があるため、指導前に完了しておく。

満水でない利用の注意

- 満水でない状態でプール使用すると浮遊物を排出するオーバーフローが機能しなくなるので水質管理に留意する。
- プール周囲に設置された水深表示と実際の水位が異なるため、混乱や危険をもたらす原因となるので、水位変更は計画的に行う。
- 水位変更情報を共有するために、1.5mの物差しで水位を測定し、最深部・最浅部の測定記録をプール日誌に記録し、確実に引き継ぐ。
- コースロープや教員が立つなどして境界を設置し、身長の高い児童が深い区域に行かないように周知するのも一つの対策である。
- 踏み台をしきつめて水深を浅くすることも考えられるが、台がずれないように相互に結索し、台の下に入り込めないような防護ネットの設置も安全対策として必要である。

緊急時対応対策

- 緊急時に円滑・迅速に救助・救命を行えるように、対応マニュアルを作成し、研修や訓練によって体制を整えておくことが必要である。
- 事故者の発見・確保・搬送・心肺蘇生・AED使用方法・119番通報に至る役割分担や連携の方法・他の児童への対応・保護者への連絡などについて、適切な指示や手順についてマニュアルとして整理する。
- 簡潔な流れ図を図解して、日ごろから見やすい場所に掲示する。
- 対応マニュアルに即した研修用映像教材や児童タイプの心肺蘇生訓練用人形を用いた研修を行い緊急時の対応のために備える。